

トピック(小谷コレクション)



展示資料No. s1

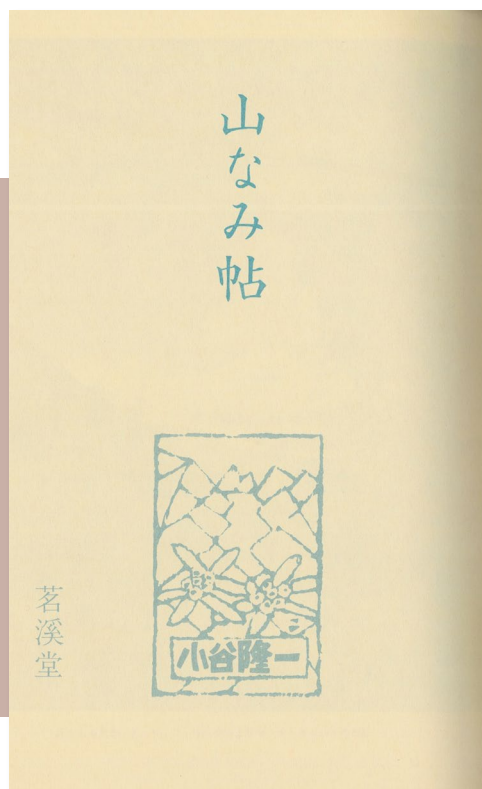
『山なみ帖』（私家版）

小谷隆一

茗溪堂

1981年8月16日発行

（小谷コレクション）



発行日はコングール山登山隊の総隊長として現地に赴き、帰国した直後にあたる。

8月13日の日記より引用

“定刻より30分遅れの16:00北京空港を離陸する。乗客は定員の半分位。PIA（パキスタン国際航空）としてはよく乗っている方だろう。ひさしぶりのPIAでなつかしい。すこしウトウトしているとティのサービス。

ミルクをたっぷり入れたパキスタンチャエ（茶）だ。メルバーンが入れてくれたティを思い出す。あの時思い出などをあつめた選筆集山なみ帖も出来上がってくるらしい。コングールを成功してこの本を配れるようだと嬉しかったのだが……（中略）

20:05成田着、日本時間21:05だ。定刻より20分遅れ。“

※ メルバーンはディラン峰「ナガールのハイポーター」に登場する朗らかな名コック

『山なみ帖』

もくじ

登山とは

登山とは

山なみ帖

我が青春時代の寮歌

山の道具今昔

冬山の帰途

ある秋の単独行

晩秋の美ヶ原

塚本閤治氏の思い出

京都北山

一九六六・七

一九六九・十一

一九五〇・二

一九四七・十

一九五二・四

一九六五・十一

アルプス紀行

アルプス紀行

いだてんアルプス紀行

ヨーロッパ・アルプスの断片

バウアー氏を訪ねて

グリンデルワルトの回想

シャモニイかシャモニクスか

アールベルクのスキー

サンモリッツ・スキー行

ディラン峰

ディラン峰

北杜夫とカラコルム

ヒマラヤとお茶

ナガールのハイポーター

『白きたおやかな峰』私感

岳友ハンス・シエル

コレクターの悦び

コレクターの悦び

英国の古書店

ロンドンで求めた山の本

ボウモントの著書について

パリの「日本名山図会」

あとがき

一九六五・十二

一九六七・七

一九六七・二

一九五四・四

一九五九・十一

一九五九・十

一九五五・六

一九六八・二

一九七七・二

一九六八・十二

一九七二・二

「附録」

小谷さんのこと

小谷文庫のエネルギー

登山隊隊長論

星々への想い

文学の縁・山の縁

北杜夫

島田 巽

塚本珪一

辻 邦夫

近藤 信行

総扉 挿絵

畦地 梅太郎

『山なみ帖』（限定版）

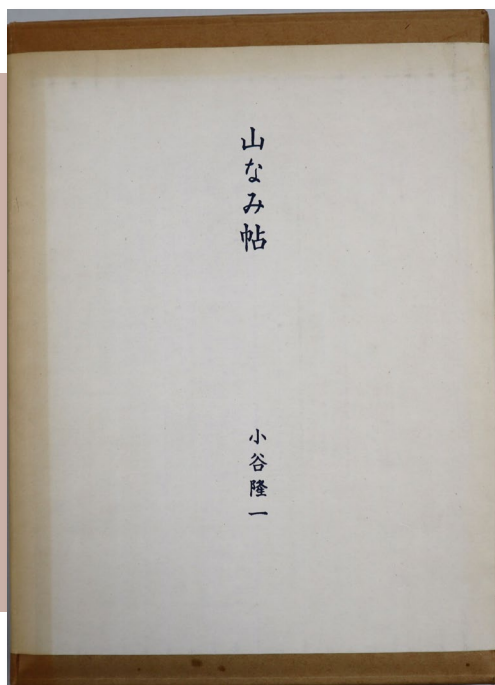
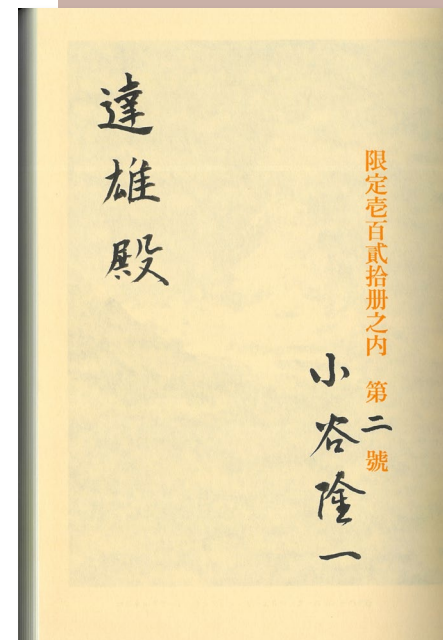
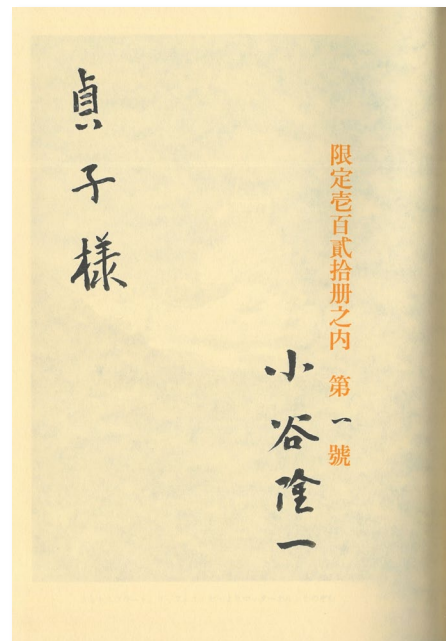
小谷隆一

1981年8月16日

茗溪堂発行

小谷達雄氏 蔵

限定壺百貳拾冊之内 第一號 貞子様
限定壺百貳拾冊之内 第二號 達雄殿

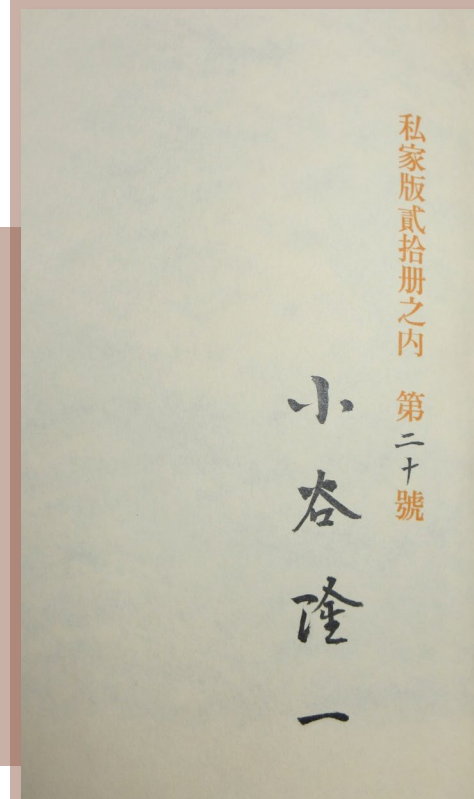
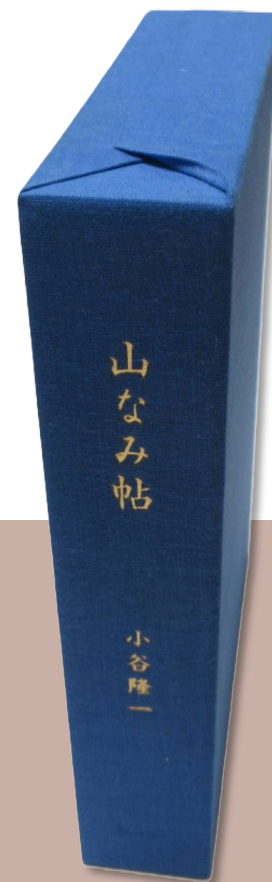
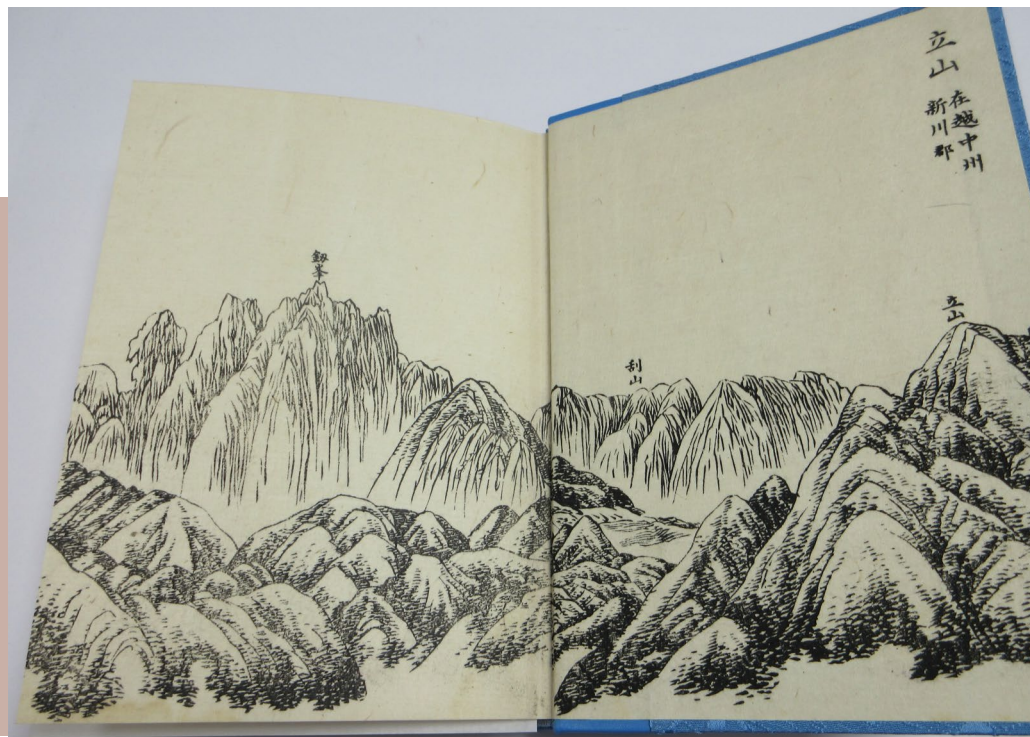


貞子 達雄 隆一（1953年撮影）

小谷達雄氏 蔵

参考資料

『山なみ帖』 愛蔵版
小谷隆一 1981(昭和56)年
茗溪堂発行
小谷達雄氏 蔵



ROTARIAN
UNITED IN SERVICE
DEDICATED TO PEACE

ロータリアン 奉仕に結束 — 平和に献身

山なみ帖 愛蔵版

小谷隆一 84.5.64
葛浅堂

No.

- 拙著「山なみ帖」の愛蔵版である。
- フランスにおいて造本を研究された大家氏の装幀、製作によるものである。いわゆるルリユール製本手法の書物である。
- 製作を依頼して以来数ヶ月、氏は表紙の革はもちろん、扉に使用する材料など自ら探しもとめ何度となく連絡をうけた。造本は製作者自身の手によって慎重にすすめられ、すばらしい出来ばえの書物となった。外箱のう本をお入れする際でも、製作者の心にくいばかりの配慮が感じられ、その芸術的手法に感心している。
- 見開きに、谷文晁の「名山図会」を使用することだけは、私のアイデアであった。かつて私の手元に、図譜・図会あわせて3部所持していたが、それに加えてパリの骨とう市でもう1部の図会を入手することになった。大へん心惜しく感じられたが、この図会を解体して扉に使用することにした。大先輩の小林義正さんが高島北海の版画を使われたように。私も第1号には文晁の富士山を使った。

国際ロータリー第265地区

『山なみ帖』（愛蔵版）

小谷 隆一

小谷書評

拙著「山なみ帖」の愛蔵版である。

フランスにおいて造本を研究された大家氏の装幀、製作によるものである。いわゆるルリユール製本手法の書物である。

製作を依頼して以来数ヶ月、氏は表紙の革はもちろん、扉に使用する材料など自ら探しもとめ何度となく連絡をうけた。造本は製作者自身の手によって慎重にすすめられ、すばらしい出来ばえの書物となった。外箱から本を出し入れする際でも、製作者の心にくいばかりの配慮が感じられ、その芸術的手法に感心している。

見開きに、谷文晁の「名山図会」を使用することだけは、私のアイデアであった。かつて私の手元に、図譜・図会あわせて3部所持していたが、それに加えてパリの骨とう市でもう1部の図会を入手することになった。大へん心惜しく感じられたが、この図会を解体して扉に使用することにした。大先輩の小林義正さんが高島北海の版画を使われたように。私も第1号には文晁の富士山を使った。

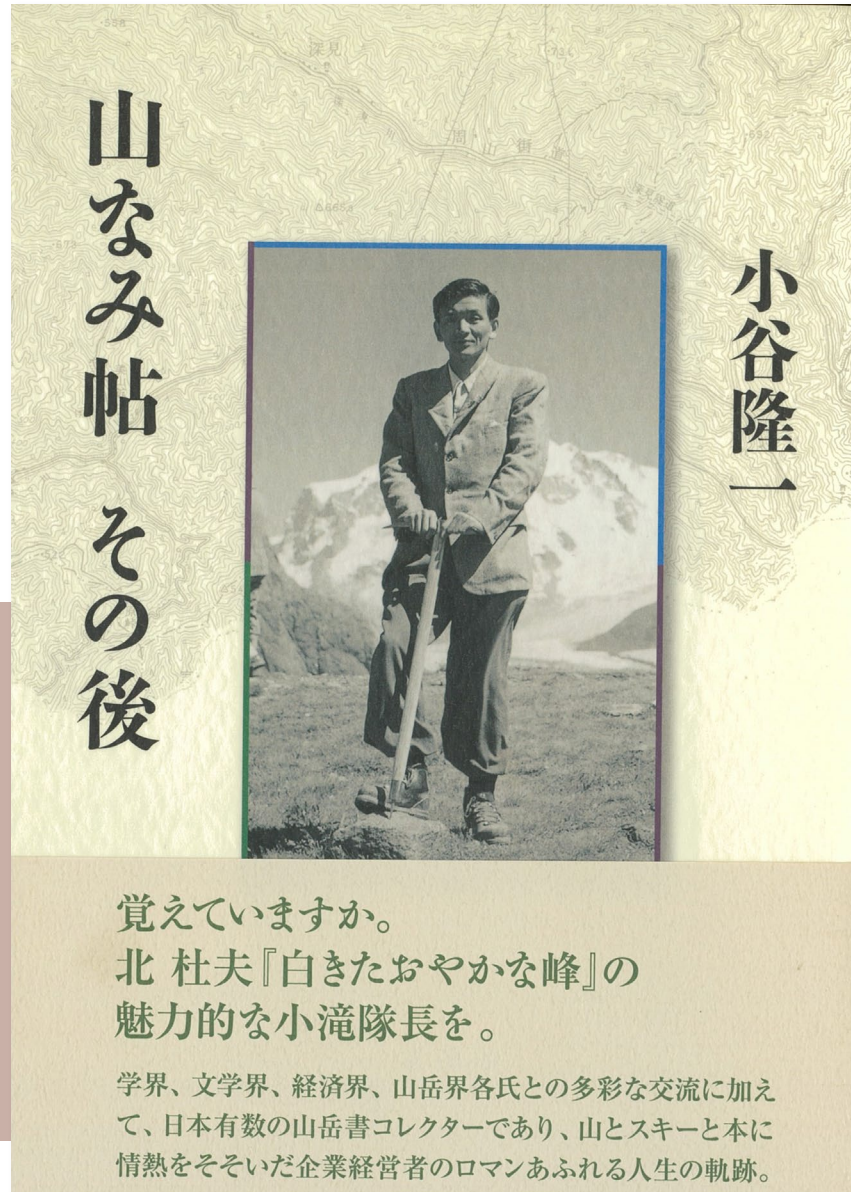
山岳名著100選

- ※ 大家氏は大家利男（おおいえ としお） 造本家 1949年生まれ
1970年に渡仏し、フランス国立エスティエンヌ印刷工芸高等学院で、箔押と手工製本（ルリユール）、工業製本全般を学ぶ。
- ※ 高島北海（たかしま ほっかい） 日本画家 1850年生まれ
明治政府技官として、日本各地の地質、山林、植物等の調査にもあたる。

『山なみ帖 その後』 小谷隆一

茗溪堂
2008年11月1日発行

(小谷コレクション)



『山なみ帖 その後』に
サインされる小谷達雄様
(2024年11月20日ギャラリートークにて)

『山なみ帖 その後』

目次

『山なみ帖』のこと

I

私とスポーツ

II

京都北山

石徹白懷古

森本次男先生のこと

「晩秋の美ヶ原」とその後

晩秋の信濃路

III

清掃登山

ヒマラヤでふたたびお茶を

カラコルムの北杜夫君

IV

私のヨーロッパ旅行 — オルゴールのかなでる思い出 —

ヨーロッパアルプスのスキー

スイス・春スキーの楽しみ

グリンデルワルトとその常宿

V

写本『秋山紀行』のご対面

〈付記〉「記行」か「紀行」か

海保青陵と江戸時代の山登り

パリで見つけた『日本名山図会』

松本高等学校山岳部の部報『わらぢ』

*

山を読んで楽しむ — 梅棹忠夫氏との対談 —

山岳名著展始末

山の書物の楽しみ — 小谷コレクションの展開と結末 —

初出一覧

小谷隆一年譜

『山なみ帖 その後』編集について

『山なみ帖 その後』刊行について／小谷達雄

『山なみ帖』茗溪堂版の目次

カバー（ジャケット）裏の蔵書票デザイン 畦地梅太郎

背 エーデルワイス 「わらぢ」第3号（第二期）表紙より

『山なみ帖 その後』より

私のヨーロッパ旅行

—オルゴールの奏でる思い出—

私の手元にオルゴールつきの古びた木製の小箱がある。何年かに一度、折にふれ全く思い出したように取り出して蓋をあけてみる。求めてからもう三十年近くもたっているのに、今もって変わらぬ可愛い音色で美しいメロディを奏でてくれる。曲は「山への別れ」(Von meinen Bergen mub ich scheiden)。日本でもときどき耳にする有名な民謡である。箱の蓋には牧場の牛小屋が一軒彫られており、その背景にはユングフラウとおぼしい山が描かれている。言うまでもなくスイス製のオルゴールである。

この小箱を買ったのは、初めてのヨーロッパ滞在中、十日余りをスイスで過ごしたときのことであった。旅行中の休暇期間として登山を試みたのであるが、グリンデルワルトを根拠地とし、ガイドを傭ってヴェッターホルン、ユングフラウに登頂し、さらに足をのばしてマッターホルンの頂上を踏むこともできた。連日快晴にも恵まれて実に楽しい登山だった。いよいよグリンデルワルトを別れる日の朝、村の通りの土産物屋で買ったのがこのオルゴールの小箱であった。

(後略)

自筆原稿 「私のヨーロッパ旅行」

1983(昭和58)年3月

小谷達雄氏 蔵

ヨーロッパ旅行

私のヨーロッパ旅行
小箱がある。何年かに一度、折にふれ全く思い出したように取り出して蓋をあけてみる。求めてからもう三十年近くもたっているのに、今もって変わらぬ可愛い音色で美しいメロディを奏でてくれる。曲は「山への別れ」(Von meinen Bergen mub ich scheiden)。日本でもときどき耳にする有名な民謡である。箱の蓋には牧場の牛小屋が一軒彫られており、その背景にはユングフラウとおぼしい山が描かれている。言うまでもなくスイス製のオルゴールである。

この小箱を買ったのは、初めてのヨーロッパ滞在中、十日余りをスイスで過ごしたときのことであった。旅行中の休暇期間として登山を試みたのであるが、グリンデルワルトを根拠地とし、ガイドを傭ってヴェッターホルン、ユングフラウに登頂し、さらに足をのばしてマッターホルンの頂上を踏むこともできた。連日快晴にも恵まれて実に楽しい登山だった。いよいよグリンデルワルトを別れる日の朝、村の通りの土産物屋で買ったのがこのオルゴールの小箱であった。

小谷隆一

「海保青陵」研究ノート

小谷隆一

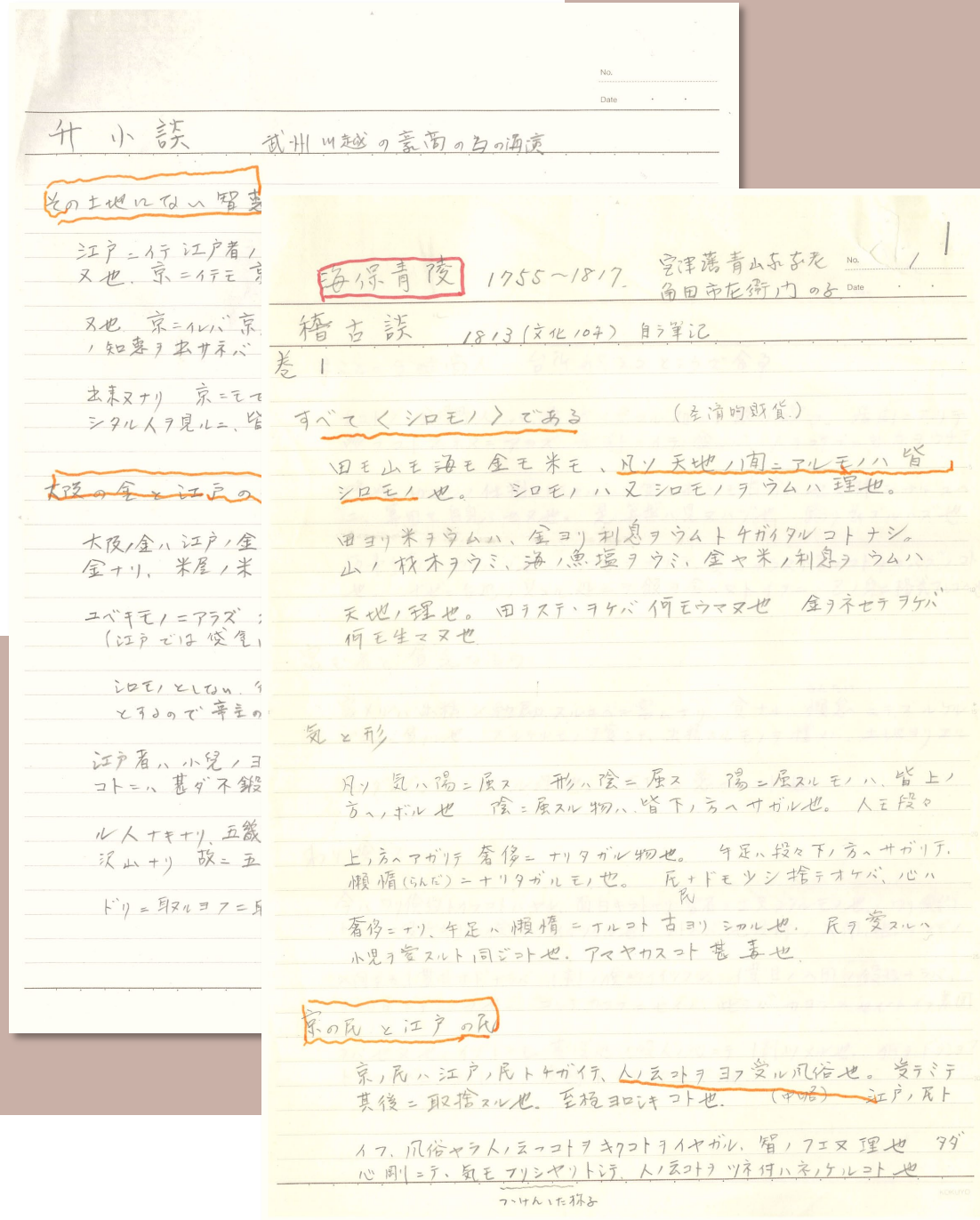
製作年不明

小谷達雄氏蔵

『山なみ帖 その後』収録の「海保青陵と江戸時代の山登り」に登場する経済思想家“海保青陵”の著作、『稽古談』『升小談』等に関する研究ノートである。

小谷は小学生の頃、祖父である2代目藤七から石田梅岩の教え（儉約、勤勉、正直）を聞かされていた。京都経済同友会代表幹事に就任する頃から、再び興味を持ち始め、研究を始め、梅岩研究家として知られるようになった。

青陵は儒教的な側面からではなく、社会・経済に主眼を置いて儉約を説いた。諸国を遊説しつつ、立山などへの山登りも行っていたことから、小谷の関心を引く。



『山なみ帖 その後』より

かいほせいりよう

海保青陵と江戸時代の山登り

江戸時代後期の著名な経済学者に海保青陵という人がいる。名は皐鶴、字は萬和、通称儀平。丹後宮津藩の城主青山大膳の家老、角田市左衛門の長子として宝暦五年（一七五五年）江戸に生まれた。

青陵の父は、荻生徂徠派の儒者であった。その薫陶を受けて育った青陵は、長じて青山家に儒官として仕えたが、その職も七年の後に辞して自由な身分となった。生涯の大半は京都に住んでいたが、特に旅行を好み、江戸・越中・加賀をはじめ讃岐・備中・紀伊などの各地を旅して講義を行っていた。

ひと言でいえば、江戸後期のすぐれた思想家であり、同時に経済学者であった。その功績は最近になって高く評価されるようになっていく。

私もかなり以前から海保青陵の思想に大きな関心を寄せていた。著作も、『稽古談』『升小談』『洪範談』『善中談』など多くの書が残されており、興味をもちながらそれらの書物を読んでいた。

江戸時代後期といえば、京都では伊藤仁斎をはじめ、山崎闇斎、石田梅岩など、すぐれた学者や思想家が少なくないが、青陵はそれらの人とはひと味違った存在であった。多くの思想家が儒教の教えの上に乗った教義を説いていた中であって、青陵の思想はまったく自由で独創的であった。

（後略）

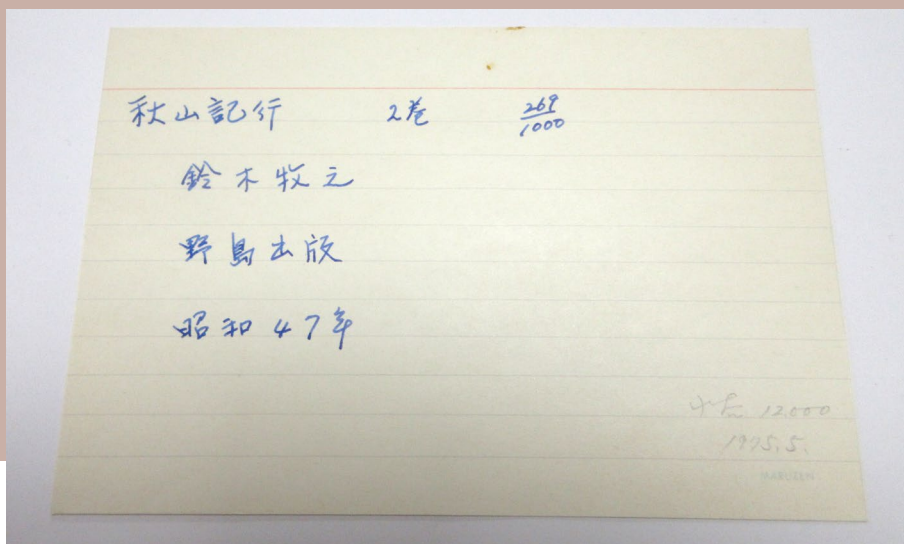
書誌カード・ケース

小谷隆一

(小谷コレクション)

手作りの書誌カードがケース内に年代別に区分けされている。

ケースに入っていないカードも多数ある。先に図書目録(ビブリオグラフィー)を作り、書誌カードを作成してから、手元に無い本のリストを作って、馴染みの本屋に一括注文し、入荷したものから購入する方法を採ったと記している。



展示資料No. s6-2

蔵書印

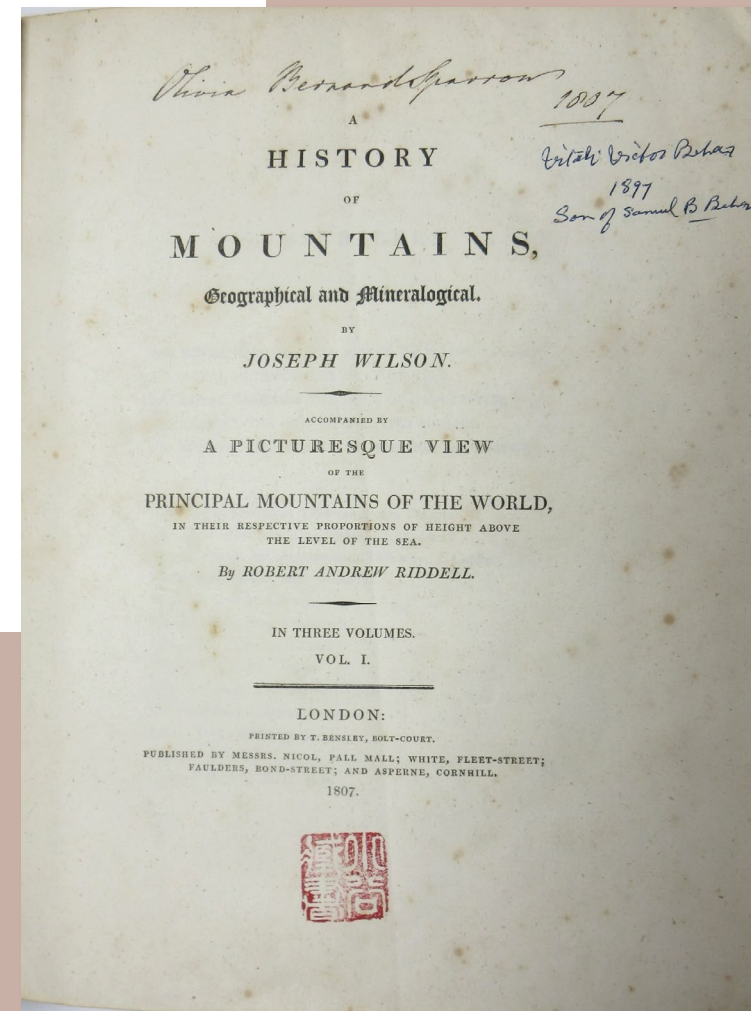
二六印房

製作年不明

(小谷コレクション)



小谷が松高時代に
作ったものであるか
どうかは不明



蔵書
小谷

『A HISTORY of MOUNTAINS,』
の扉に押された小谷蔵書の朱印



二六印房：大正4年創業の松本市中央にあった印鑑専門店
伝統の完全手彫りの印章彫刻が特徴
(2024年12月より「二六工房」として北安曇郡池田町に移る)

展示資料No. s8-1

「蔵書検索システム概算見積書」

(小谷コレクション)

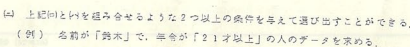
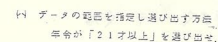
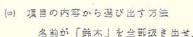
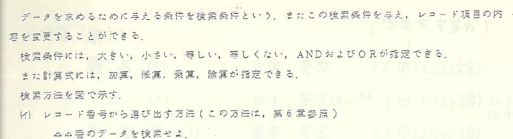
1987年に梅棹忠夫と対談した頃、パソコン活用による蔵書管理を検討していた。

蔵書検索システム仕様概略
N5200モデル05Mk II
(1984年12月発売)
NEC独自OS (PTOS)
専用データベースソフトウェア

システム概算見積 137万円



(小谷コレクション)

No. 5No. 5

ご提案機種 NEC N5200 モデル 05 MKII

本体	8"FD/HD(20MB), 12"モノクロCRT	890,000
増設メモリ		50,000
プリンター用紙		10,000
*日本語ニールプリンタ	13679(漢字60字)	320,000 320,000
(	8049(漢字40字)	248,000
	オズ水準漢字ROM	30,000
PTOS III SX		30,000
→ LANFILE 4 SX		40,000
	標準価格 → 計	1,370,000 1,370,000

*オズ標準漢字ROMは200000円以下に引き下げ

OAソフトウェアパッケージはオプションであり、使用には別途ソフトの費用は不要です。

① N5200 86mkIIの価格が 20%引きでございませう
② 送料は 97,000/年 必要です。

莖用肉厚

① 圖書カードの状態が即入力できるかにより再度入力しやすいものにしておく必要がある。その点で現在既に書庫の整理が済

- 1) 入力費用
漢字(1文字)のみ。カナ漢字(1文字)は 500 円/文字数で
1冊あたり 900 円程度。5000 冊とすると 450 万円。
- 2) ソフト
ソフトは LANFILE 4 (LAN/PC/FAX/TEL) を 45,000 円/1冊でするので
4500 冊必要に 180 万円。
- 3) 税費
4500 冊必要に 450,000 円と仮定すると
送料は 20% (10万円) 増やすと 550,000 円増します。
(送料は 197,000 円です)。

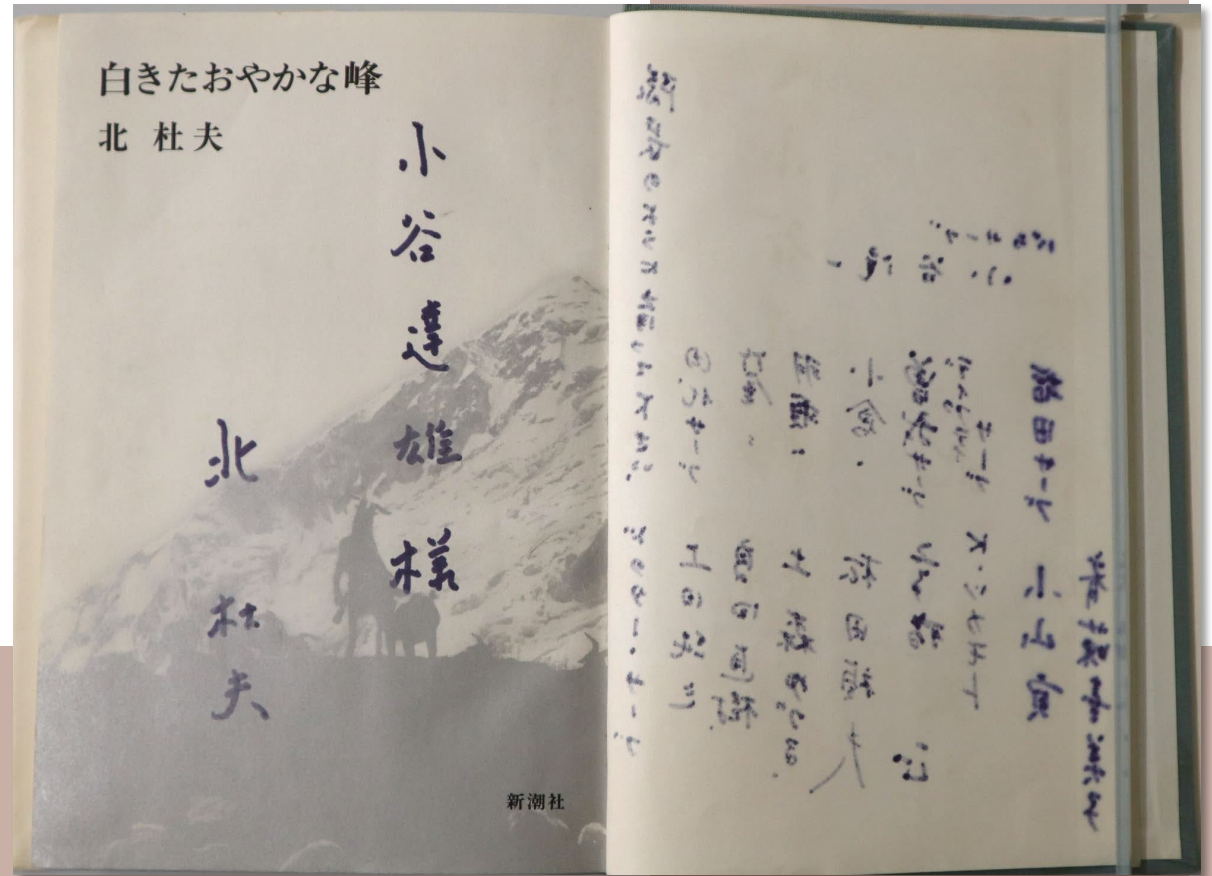
展示資料No. s9

『白きたおやかな峰』

北 杜夫（きた、もりお）1927-2011

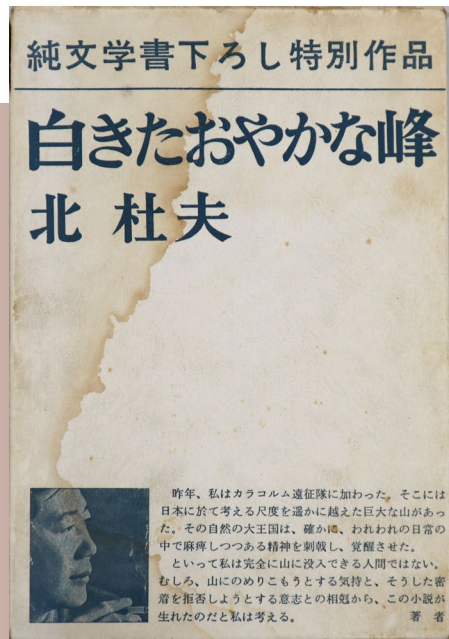
新潮社
1966年刊

小谷達雄氏 蔵

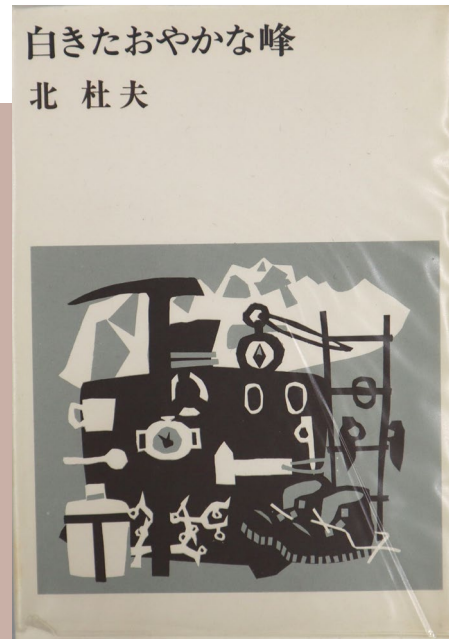


カラコルムの未踏峰ディラン（7,232m）に日本人の遠征隊が挑む物語である。

小谷隆一率いるディラン峰遠征隊の実話をもとに描かれた作品で、小谷は小滝隊長として登場する。医師として加わった北杜夫をはじめ、実際の隊員たちが名前を変えて登場している。

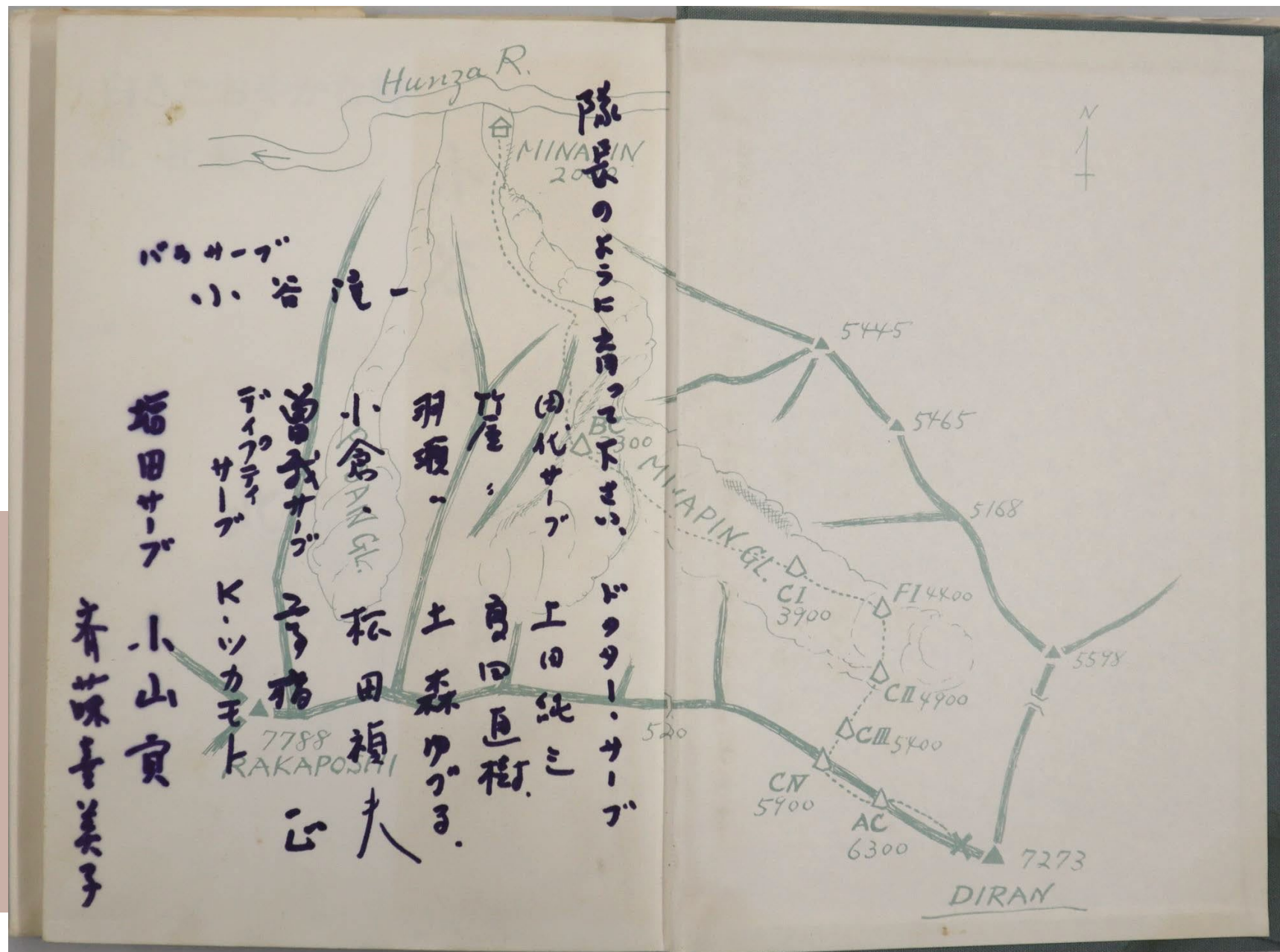


ブックケース



本体

『白きたおやかな峰』



ディラン峰へのルート図が見返しに描かれており、キャンプ地を経てDIRAN目前の×印まで到達したことが示されている。

小谷隆一をはじめとする遠征メンバーの直筆サインが、物語の中での登場人物名とともに書かれている。一番左は、斎藤喜美子氏（北杜夫人）のサイン。

ROTARIAN
UNITED IN SERVICE
DEDICATED TO PEACE

ロータリアン 奉仕に結束 — 平和に献身

白きたおやかな峰
北杜夫
新潮社 昭和41年

著者は本名斉藤宗吉、高名な歌人斉藤茂吉の次男である。山の蝶に大きな興味をもち、旧制松本高校に学んだが、私の一級下の同窓生である。主要な作品は、どくとるマンボウ航海記、楡家の人びとなど多くのベストセラーを著している。

昭和40年、京都府山岳連盟はカラコルムのディラン峰に遠征隊を派遣した。私はその隊長としてカラコルムへ向ったが、著者はドクターとしてこの登山隊に加わってくれた。そしてその登攀の状況を、ほぼ事実どおりにまとめてくれたのがこの書である。各隊員は仮名で記されているが、いずれもその性格や行動がよく描かれている。

この書物は、井上靖氏の「氷壁」とならんで本格的な山岳文学であるという評価をうけている。その後、新田次郎氏の一連の作品など多くの山岳小説が世に出ているが、この書はそれらの先駆けであろう。なお同じ著者の「岩尾根にて」「谿間にて」も小品ではあるが山の文学といえよう。

『白きたおやかな峰』

北 杜夫

小谷書評

著者は本名斉藤宗吉、高名な歌人斉藤茂吉の次男である。山の蝶に大きな興味をもち、旧制松本高校に学んだが、私の一級下の同窓生である。主要な作品は、どくとるマンボウ航海記、楡家の人びと、などで、その他多くのベストセラーを著している。

昭和40年、京都府山岳連盟はカラコルムのディラン峰に遠征隊を派遣した。私はその隊長としてカラコルムへ向ったが、著者はドクターとしてこの登山隊に加わってくれた。そしてその登攀の状況を、ほぼ事実どおりにまとめてくれたのがこの書である。各隊員は仮名で記されているが、いずれもその性格や行動がよく描かれている。

この書物は、井上靖氏の「氷壁」とならんで本格的な山岳文学であるという評価をうけている。その後、新田次郎氏の一連の作品など多くの山岳小説が世に出ているが、この書はそれらの先駆けであろう。なお同じ著者の「岩尾根にて」「谿間にて」も小品ではあるが山の文学といえよう。

『山なみ帖』より

『白きたおやかな峰』私感

かつて私は北杜夫君に、山をテーマにした小説を書いてみたら—と、すすめたことがあった。その時、提供したのは『白きたおやかな峰』のなかにも出てくる、昭和十五年、前穂高東壁における松高山岳部の遭難事件であった(『白きたおやかな峰』のなかでは、小滝隊長の経験となっているが、それはフィクションで、実際は松本高校の先輩である北村正治氏の経験された事件であり、松高山岳部報『わらぢ』六号に詳しく記載されている)。昭和の初期から、我が国の山岳会において大活躍をした、往年の松高山岳部の活動をテーマに、思い出深い寮歌もありこんで、一大ロマンを書いてほしいという、旧制高校に対する捨てがたい郷愁からくる願いであった。しかし、その希望が、このようなかたちでいられるとは、当時は考えもしていなかった。

(中略)

最後に、この作品が登山を愛する人たちだけでなく、山を知らない人々にも広く読まれ、登山とは足で登るだけのものではないということ、少しでも多くの人に理解してもらいたいというのが、私の念願である。

物語には、松本高等学校山岳部で1940(昭和15)年3月に前穂高東壁(奥又白)において実際に起きた遭難事件をもとに描いた部分がある。

小谷が実際に体験した事件ではないが、小谷が北に提供した話であった。松高山岳部報『わらぢ』で遭難の詳細な状況が報告されている。

物語中では、小滝隊長が経験した話としてリアルに描かれている。

展示資料No. s10

カメラ
スーパーセミイコンタV型

ドイツ ツァイス・イコン社

1951年製造

小谷達雄氏 蔵



1929年、ドイツツァイス・イコン社が発売を開始したカメラ「イコン」の最終モデル。1951年製造。レンズはツァイスオプトンテッサー、75mm・F3。コンパクトな折りたたみカメラで、機動性に富んでいる。



展示資料No. s11

カメラ ライカM3

ドイツ エルンスト・ライツ社
1955年製造

小谷達雄氏 蔵

1954年の発売開始当時、レンジファインダーカメラの最高峰に位置し、35ミリフィルムがスタンダードとなる契機をとったレンズ交換式カメラ。製造番号から1955年製造であることがわかる。



展示資料No. s12

カメラ プラウベル・マキナ67

日本製
1979年製造

小谷達雄氏 蔵

折りたたみカメラ「マキナ」を製造していたドイツプラウベル社をダイグループの土居君雄が買収、プラウベル社・ニッコーレンズ・小西六（現・コニカ）各社の技術を駆使して製造された常用できる6x7の日本製カメラ。ニッコールレンズの描写力はこのカメラ最大の魅力。電子的装備を最小限に抑え、電池がなくても撮影できる点も特徴。



期間限定 展示資料①

H-16 SUPREME 16mm Camera

Paillard Bolex
1954年

小谷達雄氏 蔵



後ろは専用の収納バッグ(茶色)

期間限定 展示資料②

記録映像 「西部カラコルム ディラン峰に挑む 7273M」

映像提供 京都府山岳連盟

1965(昭和40)年の遠征記録「西部カラコルム ディラン峰7273mに挑む」(音声なし)に、塚本珪一氏のナレーションをつけ2007(平成19)年に編集した映像です。



記録映像
「西部カラコルムディラン峰に挑む 7273M」(約27分)

(制作:信州大学附属図書館, 2007.)